

「仕事 おじゃま します」

「膨大な数の石のひとつひとつは、社会にあふれる個々のインフォメーションです」。一定の知識と経験を備えた人物が、いくつかの石に目をとめる。よく洗う。中にキラキラと輝く石が見つかる。並べてみる。順番を入れ替えてみる。やがて、その輝く石の集まりが何らかの意味を持つように見えれば、それが「インテリジェンス」だという。

「しかし、インテリジェンスの歴史を振り返ってみると、それはほとんど失敗の歴史です。米国の情報当局は真珠湾攻撃も9・11も予測できていません。だからこそインテリジェンスに取り組む人物は、謙虚でなければいけないのです」

横浜・日吉にある慶応大学の研

外交ジャーナリスト 手嶋龍一さん



研究室の蔵書や資料は、これで「ほんの一部なんです」＝横浜市港北区、倉田貴志撮影

謙虚なMr.インテリジェンス

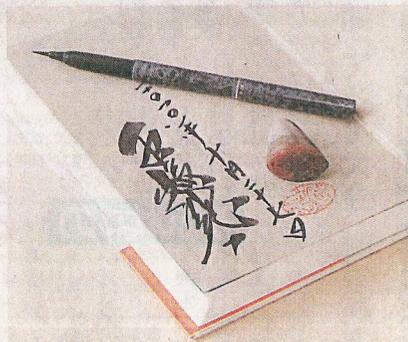
研究室で手嶋さんは、そう話した。ジャーナリストで作家でもある手嶋さんは、ここで学生たちに、インテリジェンスを教える教授としての顔も持つ。「いろんなことに手を広げてしまつて、でも基本はものを書くこと。研究室でもどこにでもパソコンを持ち歩いて書く。さまよえるもの書き」と自称しています」

名づけての競馬通でもある。友人が保有する北海道の競走馬の牧場にあるオフィスで執筆することも多いそうだ。早朝の早い切りのデータを集める。過去のレースの膨大な記録を洗い直す。インテリジェンスの感覚を磨くのに競馬は最適だという。

「ジャーナリストとして物事の立ては、そう間違えずに来ていると思つていますし、実は競馬の予想も悪くないんです。しかし馬券で生活するまでにはなれません」

それは、勝っているうちにやめる自制心が欠けているからなのだろう。せっかくのインテリジェンスで勝負のレースを当てるのに、つい次のレースも馬券を買わずにはいられない。「勝つのはそう難しくない。本当に難しいのは、負けないことなんです」と話した。

(小林伸行)



筆圧が強いので、著書へのサインは、お気に入りの筆ペンで。印は、自作の小説に登場する作中人物のモデルとなった人物からの贈り物という

てしま・りゅういち 1949年、北海道生まれ。74年NHK入りし、ボン特派員、ワシントン支局長などを経て05年退職。ことし2月、英国秘密情報部員ステイブン・ブラッドレーが主人公のインテリジェンス小説第2弾「スギハラ・ダラー」(新潮社)が刊行された。